アルジェリアの悲劇に想う

広沢　勉

正月が明けてまもない 1 月 16 日に発生した「アルジェリア人質事件」は、日揮や関係会社の社員 10 人が犠牲になるといういたましい結果に終わりました。犠牲者の霊に哀悼の意を表します。

事件発生の現場が天然ガス・プラントということで、液化天然ガス(LNG)プラントを思い浮かべたのですが、テレビで見ると LNG プラントではないようです。私は、40 年ほど昔、プルタミナの日本子会社に出向したことがあって、天然ガス精製プラントや LNG プラントについて若干の知識があります。また、西ジャワ沖合で採掘された天然ガスをクラカタウ・スチールに送るチラマイーチレゴン・パイプライン・プロジェクトに関係して、チラマイにある天然ガス精製プラントを見ています。テレビに映る今回の事件現場のプラントは、チラマイのガス施設に似ているので、LNG プラントではなく、精製プラントだと思います。

プルタミナの LNG は、北スマトラのアルンとカリマンタンのボンタンが二大生産基地でした。日本の LNG 輸入の相手先として、インドネシアは 40%以上のシェアを占めて圧倒的な首位を占めていました。ところが、2010 年の LNG 輸入実績では、インドネシアはマレーシア、オーストラリアに次いでの 3 位になっています。アルン・ガス田が枯渇し、2014 年に完全閉鎖するに至っていること、ボンタンも、天然ガス生産の不調から思うような増産が出来ないことが起因しているようです。ちなみに、ボンタン LNG プラントの EPC(Engineering Procurement Construction)コントラクターは日揮でした。LNG の日本への輸入先の 4 位以下は、カタール、ロシア、ブルネイ、アラブ首長国連邦と続きます。アルジェリアから日本への LNG 輸入はないようです。調べてみると、アルジェリアは天然ガス生産量はアフリカ最大で世界でも 9 位、地中海の海底パイプラインでイタリア、スペインに送っているとのことです。

人質事件発生から 10 人の死亡が確認されるまでの情報は錯綜の連続でした。“地の果て”と報道したメディアもありました。“地の果て”とは、昭和 30 年代に唱われた歌謡曲「カスバの女」の歌詞、“涙じゃないのよ　浮気な雨に　ちょっぴりこの頬　濡らしただけさ　ここは地の果て　アルジェリヤ　どうせカスバの　夜に咲く　酒場の女の　うす情け”にある“ここは地の果てアルジェリア”からの連想でしょう。「カスバの女」の二番の歌詞には、“明日はチェニスか　モロッコか　泣いて手をふる　うしろ影　外人部隊の　白い服”という一節があります。私は、昔、池袋にあった名画上映館「人生座」で、ゲーリー・クーパー、マレーネ・ディートリッヒ主演の「モロッコ」という戦前製作のハリウッド映画を見たことがあります。この映画は、ゲーリー・クーパー扮する兵士が所属する白い制服の外人部隊が砂漠の中を移動するのを、マレーネ・ディートリッヒ扮するモロッコの場末の酒場の歌手がハイヒールを脱ぎ捨てて裸足で追うというラスト・シーンが有名ですが、“外人部隊の白い服”という歌詞は、この映画をモチーフにしているのでしょう。戦前の映画と言えば、ごく最近、ジャン・ギャバン主演のフランス映画「望郷」を DVD で見まし

た。主人公のペペル・モコが警察に追われて逃げ込んだ先は、フランスの植民地だったアルジェリアのカスバでした。

“ここは地の果て”で思い起こすのは、半世紀前のジャカルタです。その頃は、JAL 便もシンガポールまでで日本からの直行便はありませんでした。日本との通信手段は電報、航空便でも 1 週間から 10 日はかかりました。もちろん、日本料理店もカラオケもありません。当時の在留日本人は、殆どが単身赴任で 100 人いたかどうかでしょう。娯楽と言えば、日本人仲間とのゴルフとマージャンだけでした。まさに、“ここは地の果てジャカルタよ”の想いでした。ちなみに、JAL のジャカルタ便開設は 1962 年 7 月、当時のクマヨラン空港に降り立つ日本人スチュワーデスを見に行きました。

アルジェリアの人質事件 10 人目の犠牲者のご遺体は、パリで成田向けの民間機に移されてのご帰国となりましたが、先に死亡が確認された 9 人のご遺体は、生存者 7 人や政府関係者、日揮社長とともに羽田空港に直行の政府機によるご帰国でした。私はテレビの実況放送を見ていて思い出したのは、今から 47 年前、セレベスのマカッサルで亡くなった 3 人のご遺骨の帰国でした。1965 年は 9 月に「9.30 事件」が起きた年ですが、その年の 12 月 13 日、兼松が賠償で受注したマカッサル製紙工場プロジェクトで、プラント・サイトに向かう駐在員や関係会社のエンジニアを乗せた車が道路脇の立木に衝突、後部座席の関根さん、割石さん、赤穂君の 3 人が死亡、運転していた猪俣さん、助手席にいた田中さんは重傷で入院という事故が発生しました。赤穂君は、私の学校の後輩で、その年の 4 月に帰国した私と入れ替えで現地に赴任したばかりでした。東京のプラント部の担当者だった私は、ジャカルタ経由、電報で飛び込んできたそのニュースに愕然としました。その頃は、「9.30 事件」の影響もあってか、国際電話は英語かインドネシア語で話さなければならず、また、マカッサルの電話状況は劣悪でしたので、連絡は、ジャカルタ事務所との間でインドネシア語で行いました。亡くなった 3 人のご遺体は現地で荼毘に付せられましたが、荼毘に付す際、ヒンヅー教の僧侶が導師となっての葬儀が行われたと聞きました。遺骨は現地であつらえた木箱に収めて、軽傷の田中さんが携行することになりました。田中さんは、遺骨の入った木箱をトランクに入れて荷物扱いとして JAL に託しました。税関にも JAL にも遺骨であることは申告したそうです。羽田空港には、遺族と町田社長を始めとする兼松関係者が出迎えました。3 人の葬儀は、青山葬儀所で社葬をもって執り行われました。

アルジェリアの悲劇を悼むことから、思いつくままに書き連ねました。まさに錯綜した情報の提供です。ペンを置くにあたり、もう一度、犠牲者の冥福を祈ります。（完）